



ペンゴ

2017年4月1日発行
(毎月1回1日発行)

谷山カトリック教会

891-0113
鹿児島市東谷山2-33-13
TEL 099-268-2084
FAX 099-284-5738

E-Mail: taniyama-cc@lagoon.ocn.ne.jp URL: http://www5.ocn.ne.jp/~tycc/

発行人: 頭島光 神父 編集委員: 太田通二郎 Sr. 下川千穂子 岸誠之助

みことばは賜物

上記のタイトルに続くのは「他の人々は賜物」。これは2017年・四旬節の教皇フランシスコ様からのメッセージです。教皇様が私たちに言いたいのは賜物に目を留めることです。無関心こそが最大の敵です。無関心は恐ろしい罪です。谷山共同体の、これからの二年間の小教区としてのテーマは「共に暮らす家を大切に！」とします。もし、私たちがこの「共に暮らす家」について無関心なら、一体どうということになるでしょうか。罪は目の前に迫っています。私たちはそれを支配しなければなりません。

賜物はあなたの隣人

賜物は神様からの贈り物です。賜物を通して神は人と交わりたいのです。神が人と交わるのは神が愛だからです。神からの贈り物である賜物とは、あなたの隣人のことです。イエスが「あなたの隣人を愛せよ」と言ったのは、隣人があなたにとって賜物なのです。だから、他人に無関心になることは、愛の欠如という罪です。どんな人にも関心をもって交わることが求められています。人との関りなしに、人はどうして寄り添えるでしょうか。人に寄り添い、関わっていくことで、あなたは自身のアイデンティティを理解することになります。

ラザロと金持ち

教皇様は「他の人々は賜物」を説明するために、ルカ福音書の「ラザロと金持ち」の話を持ち出します。ご承知のように金持ちはラザロを知っていました。いつも自分の家の門前に座っていた物乞いだったからです。しかも、名前まで知っていたにも関わらず、生きている間に何もしてませんでした。ラザロは神からの賜物であり、関心を持って、彼を愛し、交わりさえすれば、金持ちはアブラハムの宴席にラザロと一緒にいたことでしょう。金持ちは人を愛する機会を自ら断ったのです。金持ちはせっかくの機会を逸しただけでなく、神から愛される機会すら失ったのです。

関りと交わり

すべての人を愛する神様は、愛の機会を私たちにも与えています。つまり、世界は神から愛すべき贈り物として与えられた感謝すべき賜物です。だから、すべての被造物と関わり、愛の交わりを持つことで、私たちは回心へと導かれていきます。回心とは神に心を向け直すことです。もし、神に心を傾けないなら簡単に罪に陥ります。被造界と真摯に向き合い関わり、自らの愚かな過ち、落ち度、そして失敗に気付くでしょう。被造物を我儘に所有しようとする愚かな執着心を捨て、小さく微かなものに心を留める、あなたの心の素朴にこそ、あなたの真実があるのです。



自分から出て

私たちは、いつでも自我から出て、尊敬すべき他者へと新たに向かうことができます。それぞれが、それぞれの福音的価値を持っていることに気がしましょう。他のすべての被造物を認め、それらをケアしていきましょう。他者の存在に関心を持ち、心をかけて配慮しましょう。そうすれば、相互に愛が成立することを体験できるからです。愛する人は、神の贈り物である賜物を大切にします。関り、交わりながら、生きることで、初めて「共に暮らす家を大切に」していくことになるのです。

今月の聖人から

モンテプルチアノのアグネス

4月20日

アグネスは、1268年頃イタリアのトスカーナで生まれました。わずか9歳の時、彼女は近くのモンテプルチアノの修道院に入ることを両親に頼み、その望みがありませんでした。

数年後、新しい修道院がプロセナに開設されて、そこからモンテプルチアノ修道院は誰か院長になる人を送るようにと頼まれました。院長として赴任することに決まった修道女は、アグネスを自分の助手として連れてゆくことを条件にしました。アグネスが新修道院にいることが知れると、多数の志願者が集まってきました。そして15歳の時、教皇様の特別な許可があって、院長に選ばれました。

聖女アグネスの苦行は非常に厳しくて、15年間パンと水で生き、石を枕として床の上に寝ました。幻の中で自分の腕に幼いイエズスを抱いたこともあると伝えられています。

モンテプルチアノに新しい修道院が建てられた時、アグネスは院長になりましたが、彼女の名前はその修道院と共に益々有名になりました。死期が近づいた時、彼女はそばで悲しむ修道女たちに言いました。「私があなた方を置き去りにしなかったことを、皆さんは今にきっと悟るでしょう。あなた方は、私を永久に所有するのです。」



Taniyama CC NEWS

3月3日、世界祈祷日の集会祭儀が私たちの谷山教会でありました。例年四旬節の第一週の金曜日開催されますが、今年は市内七つのプロテスタント教会と四つのカトリック教会から90名を超える参加がありました。これは例年の倍の集まりでとても賑わいました。

今年のテーマは「フィリピンからのメッセージ」ということで、沢山のフィリピーナ信徒も参加されました。志布志教会からはベルナルディーノ神父様もお越し下さり、茶話会では珍しいフィリピンの手づくりスイーツが振舞われて、心もお腹も満たされたひと時でした。

また十数万円近くの献金があり、事務局の方へお送りすることが出来ました。神に感謝。（上釜、）



3月20日 鹿児島ハイドン協会合唱団第12回演奏会が行われました。曲目は、モーツァルトの交響曲第33番とハイドンのオラトリオ「十字架上のキリストの最後の七つの言葉」でした。

お御堂は溢れんばかりの満員盛況で、素晴らしい音楽に聴きほれました。時は正に四旬節、ゴルゴタの丘で発せられたお言葉を、聖書を開きかみしめたいと思いました。



ムイベルガ神父のアンテナ

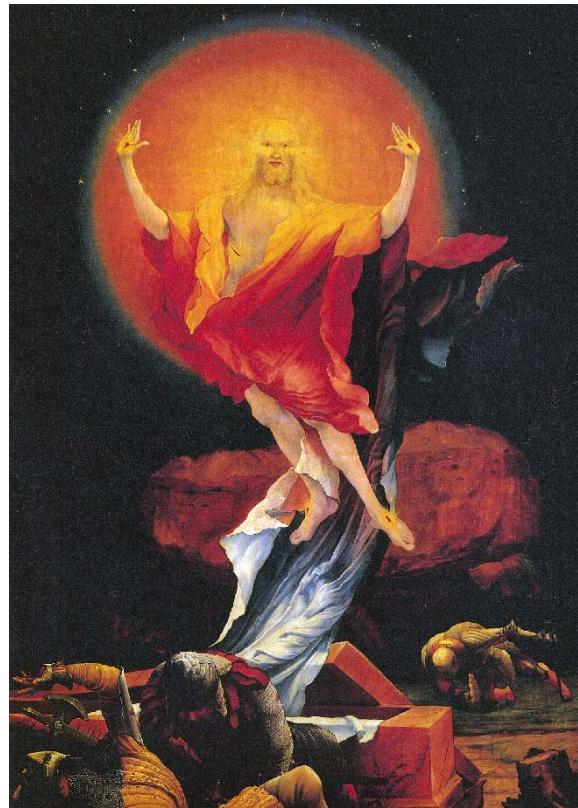
復活

16世紀にイエズス会の神父たちが日本に来てキリスト教を教えました。それは非常に難しいことでした。仏教の輪廻の教えが日本人の心と文化の中に深く入り込んでいたからです。今回は、私の過去の論文を引用して、復活について述べてみたいと思います。(引用：「日本における信仰」ヨゼフ・B・ムイベルガー、サンパウロ刊362-363頁)

キリストにおいて救われた者の復活後の肉体は、どのような特徴を持っているのでしょうか。この質問にヴァリニャーノ（イエズス会士、全インドの巡察師 1539-1606）はスコラ派の天賦 (lat. *notes*) 論をもって答えています。まず、人間は死の時に当って、送って来た生涯に対する責任をとることになります。ヴァリニャーノによれば、不死の魂は審判を受けるために神の法廷に出席せねばならず、善人には報酬を悪人には責め苦を、それぞれの善悪に応じて定められた上で、すべての人間が神により再び肉体と靈魂の結合を受け生命を持つに至るのです。

不死の魂故に、変容した肉体は、四つの賜物を持っています。それは、受苦不能性 (*im-passibilitas*)、精敏性 (*subtilitas*)、敏捷性 (*agilitas*)、透明性 (*claritas*) です。受苦不能性とは、復活した肉体が「…苦痛・責め苦に悩ま

されず」、「…寒気の手も、炎の焔熱も」、そのほかの天候の不良に煩わされることがないのです。精敏性により「険しい場所の障害も、何らの妨げ無しに克服する」ことが出来ます。「肉体は重荷から…解放され」たのですから、「魂がどんな処へ行くように命じようとも、その運動より速くは



考えられぬほどの、信じがたいほどの容易さ (敏捷性) で運動し得るのでしょうか。最後に「透明性が加えられる、…聖者たちの肉体は、あたかも真昼の太陽光線で閃くように光り輝くでしょう。断罪された人々は、痛みにも敏感な硬くて動きにくい肉体を得、汚れと硫黄の悪臭の中で病み衰えていくという罰を受けるのです。

ヴァリニャーノは洗礼志願者に、復活されたキリストの栄光が人生の最終目的であることを忘れないようにと呼び掛けています。

このキリストは、洗礼志願者の魂の花婿であり、洗礼志願者は洗礼を通してこの花婿と結び付けられます。復活されたキリストの体は、洗礼志願者に不死を示しています。この不死、すなわち完成と完璧さは、自分自身が努力した上に、キリストとその花嫁である教会との交わりに於いて、神から受け取ることが出来るのです。それ故に、復活、永遠の命、すなわち神の恩恵の贈り物を疑うものは、神の全能に対しての重罪を犯すこととなります。